
ひぐらしのなく頃に ～死を運ぶ者～

L.L.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に　　死を運ぶ者　　

【Nコード】

N 6 4 6 1 R

【作者名】

L・L・

【あらすじ】

ひぐらしのなく頃にの世界に新たな存在。
二人の青年が現れる。

彼らが運ぶは未来か死か。

蝸の声が木霊する寒村で、惨劇が始まる。

第壹話「紅き眸と蒼き瞳」

第壹話「紅き眸と蒼き瞳」

揺れる列車、響いてくる振動。列車は雛見沢に向かっていている。夢と現実の境目、まどろみから覚めるか覚めないかという時、声が……聞こえた気がした……………。

「……ん……い……ごめ……さい」

ただ何度も同じ単語をのべている。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

ただひたすらに謝っている。

許してやればいい……こんなに謝っているんだから。この世の中に許されないことなどありはしないのだから……。

「圭一、そろそろ起きなさい。もう着くぞ」

父親に起こされて目が覚めた……、もうあの声は聞こえない。

もうすぐで到着だ、雛見沢に……。

雛見沢、そこは某県、鹿骨市にある寒村である。そこにはコンビニやゲームセンターなどではなく、周りは山に囲まれた田舎と呼ぶに相応しい場所だ。そんな村に不釣り合いな大きな家、回りの木作りの家とは違い、大きく目立った家。前原宅、雛見沢の人間には前原屋敷と呼ばれ、どのような金持ちが来るのか。そう噂されたが、実際は普通の家庭である。

この家が大きいのは父親の仕事が由来している。

父親の名前は前原伊知郎、画家という職業についている、そのため家にはアトリエが必要であり、家は自然と大きくなる。

そしてキッチンで朝ごはんを作る女性、前原藍子。前原伊知郎の

妻である。

専業主婦であり伊知郎を支える良き妻である。

「けーいちー、そろそろおきなさい」

前原家の二階で眠る少年、前原圭一。伊知郎と藍子の息子である。

「ん……？ ふぁーあ」

心地よい夢からだんだんと目が覚めてくる、彼ら家族は前日まで東京に葬式に行くため、ここ雛見沢を離れていた。

その疲れが溜まっているせいかいつもよりも体がダルく感じる。

「……もう朝か」

暖かく居心地のいい布団からでると下からいい匂いが漂ってくる。

圭一は服を着替え、下に向かった。

「おはよう、圭一。ご飯は何盛り？」

「大盛り」

「もうあまり時間が無いんだから、はやく食べちゃいなさいよ」

「分かってるって、いただきます」

いつもより早いペースでご飯を胃に送り、学校へ行く支度を整える。以前の暮らしを考えると、ありえない事だが、本人は気付いていない。

「そうそう圭一、レナちゃんにお漬物ありがとうって伝えて頂戴」

「了解。じゃ、行ってきます」

すこし駆け足でいつもの待ち合わせ場所に向かう。

（レナのやつ、たぶん待ってんだろうな・・・）

案の定、レナは少し待ちくたびれた様子だった、彼女の名前は竜宮レナ。圭一の家から少し離れた場所に住んでいる同い年の女の子。転校翌日からこの待ち合わせ場所で、たまに家まで迎えに来てくれる優しい娘だ。

毎朝こんな事ができると圭一は感心してしまう。圭一が来た早々謝ればニツコリと微笑んで許してくる。

「そうそう、母さんが漬物美味しかったって。」

「ほんと？ よかったー、すこし心配だったんだー」

「けどさ、毎朝毎朝大変だろ？ たまには遅くなったりしてもいいんだぜ？」

「あんまり圭一君を待たせたら悪いでしょ？」

（たまには逆方向から攻めるか……）

「そんなときや置いてく」

きっぱり言い切ると、レナは慌てて圭一の後ろをついてくる。

「キリキリ置いてく、サクサク置いてく」

「どうして意地悪するんだろ、だろ？」

人の言葉を疑わず、すぐに信じてしまう。彼女の長所であり短所である。

（このあたりで勘弁してやるか……）

圭一は足を止め振り向きながら、まるで少女マンガに登場する男の子が告白するように語りだす。

「待ってる、レナが来るまで。ずーっと待ってる、いつまでも」

レナはまるで湯気が出そうなくらいに、頬を染めてもじもじとしている。

「はう、ありがと……」

その後レナは黙ってしまつて俯いている。圭一の言葉がよほど効いたらしい。おとなしく圭一の後ろを歩くレナだった。

次の分かれ道、そこでもう一人の待ち合わせ。

「おはよう圭ちゃん、レナ。遅いよ！ 二人とも」

この園崎魅音だ。

「おはよう、魅いちゃん」

「おはよう魅音、今日も元気そうだな」

元気印を人間にしたような「園崎魅音」女だが圭一の男友達のようなものだ。

「あつたりまえでしょ、オジサンはいつも元気だよ。それより

も圭ちゃんの方が朝は元気で大変でしょ？ほら朝d……」

その瞬間、魅音が飛んだ。いや、飛ばされたのだ。そばに立つニッコリ微笑んだレナに。

通称「レナぱん」音速で繰り出すそのパンチを捕らえられる者は居ない。

「おゝい魅音？ 生きてるか？」

まあコイツは殺しても死なないから大丈夫か。

「なんの話をしているのかな？ かな？」

この無垢な少女の何処にあんなパワーが有るのか、それは永遠のなぞだった……。

そして着いた雛見沢分校。もともとは複数あったらしいクラスも今では一つ。しかも学年混同となっている。

「レナ下がってろ、奴だ！」

教室の前で違和感を感じる、今日もか……。

そう“トラップ”だ。俺は常日頃から戦っている、あの悪魔と！

「さあ圭ちゃん、覚悟はできた？」

「当たり前だぜ！ 今日こそ完璧制覇だ！」

「がんばって、圭くん」

俺は勢い良く教室の扉を開けた！ 上から軽い音……黒板消し！ それを華麗に避ける。

だが足が引っかかりバランスを崩した、次は縄跳びだど！？ マ

ズイ！ さらにその先に水がたつぷりのバケツ！？ さらに避けられる場所には墨汁たつぷりのすずりが！？

「無理」

勢い良く、だがせめて墨汁ではなくバケツのほうに倒れた……盛大な水音と俺が倒れる音、今日も負けた。そう思いながら悔しい心に高い声が聞こえてきた。

「おーっほっほっほ！ おはようございますわ圭一さん！

あら？ そんなところで寝ていると風邪を引きますわよ？ あっ“馬鹿は風邪を引かない”と言いますから心配無用ですわね！ おー

っほっほっほっほっほっほ！」

血管の切れる音が聞こえたような気がした……。

「さあーとおーこおー！ お前かー！」

「さあ？ 何の事ですかしら、圭一さん？ よくそんな無様な格好、ワタクシには真似できませんわ」

ああ、また血管が切れる音が聞こえたような気がした……。

俺は沙都子が逃げられないよう、襟首をつかみ沙都子のおでこの前で人差し指を親指で押さえる、そう“デコピン”である。

「貴様はデコピンの刑だー！」

そのとき服の端が引つ張られた、振り向くと梨花ちゃんが。

「圭一……沙都子は圭一がなかなか帰ってこなくて寂しかったのですよ」

「りか！？ それは言わないでとあれほど……」

「にぱ☆」

この笑顔には適わないとおもった。

「はう~~~~！ 恥ずかしそうに俯いている沙都子ちゃんかあいよ~~~~お持ち帰り~~~~！」

吹き飛んだ……いや吹き飛んだ意識はなく、気がつけば俺は大字に寝ていた。

「圭ちゃん、だいじょぶ？」

「俺は生きてるか？ とうか見えなかった」

あのパンチは世界を狙えるパンチだ。

「そんな事よりみんな先生来るよ！ 早く片付けて~~~~！」

魅音の号令に従い皆でトラップを片付ける。これがこの教室のいつもの風景だった。

そして時間は流れて昼休み。

「そういえばさ、明日転校生が来るらしいよ」

昼休みの給食、いつもの様に皆で机をくっ付けて食事中だった。

始めはみんなで弁当をつつき合うなんて想像ができなかったが人間慣れれば案外順応できるものだ。

そんな中、魅音は思い出したように語りだした。

「転校生？
男か？
女か？」

「残念圭ちゃん、男の子が二人だよ」

男の方が良いんだけどな。

「二人？ いっぺんにか？」

「ああ兄弟二人なんだよ。双子のね」

「その方でしたら私達は会いましたわよ？」

「ホントか？」
沙都子

「ええ、引越し祝いに近くのおうちにそばを配ってましたわ。」

「じゃあ、沙都子ン家の近くなのか？」

「そうなのです、神社のすぐ近くなのですよ」

「じゃあ帰るときは一緒かな、かな」

「そうだね、これで二人とも安心だね。でも気を付けなよ、タクちゃんたまに狼だから」

「ええ、多久矢さんのほうは圭一さんと似ていますから、十分承知ですわ」

「沙都子サン？
それは俺が狼と？」

「あら？ 自覚がないんですの？ 重症ですわね」

また血管の切れる（以下略）

「なあんだー！」

「くっくくくく、圭ちゃん、お弁当」

下を見ると……無い！ おかずが！

「なあ——！、おかずが減ってる——！！」

しまった、喋りに夢中で気付かなかった！

「なら、沙都子！ お前のミートボール貰ったああ！（パク）」

ぎゃあああああ！！
み、みず！！！！」

辛い!! 辛い!! 辛い!!!

「オーホッホッホッホ、タバスコ入りのミートボールはいかがですか？ 圭一さん」

「沙〱都〱子〱!! お前と言う奴は〱〱〱!!」

「いや〱〱〱ケダモノ〱〱〱!!」

「誤解を招くことを言うな――!!」

「レナお姉ちゃん、圭一さんがいじめますの(泣)」

「はうううう、沙都子ちゃんかぁいいよおお!」

ぴかーん!!

「げふっ!」

俺はまた大の字になっていた……。

「圭ちゃん、生きてるか?」

「もう死んでるか」

「かわいそ、かわいそなのです。なでなで」

部活メンバーは今日も元気だった……。

その後、知恵先生が来て授業が始まった。

この学校は基本的に授業の難易度は高くない。だが見た限りでは皆なんとか着いてきている、といった感じだ。

教室では年齢別に別れて、それを知恵先生が見て回る。ただ魅音とレナは圭一が勉強を見ている。

「で、ここはこう代用するんだ。」

圭一が式を書きながら、詳しく説明する。

「なるほど、そういうことか」

レナと魅音はその説明でようやく分かったらしく、おのおの回答を書き込んでいく。

「けどな、魅音、レナはまだ分かるがお前は年長者だろ? これは正直マズイだろ?」

「え、都会じゃこんなものしなきゃならないの?」

「まあ、これくらいは出来ないと言進学は難しいな」

「はあ、なんで必要の無い勉強するのかな」

「まあ卒業のためだろ。そのためには勉強するしかないだよ。やくに立たないと分かっていてもな……」

「あたしゃ無理だね。そんな無駄な時間を過ごすくらいなら、い

ま楽しい事をするほうが何倍もマシだよ」

魅音は遠い目をしながら笑っている。

（勉強より楽しい遊びか……前の俺なら同意できなかっただろうな）

「つて!! お前はただこの問題が解けないだけだろう!」

「テヘッ!」

みればレナと魅音に別々に提示した問題、レナは何とか書いたり悩んだりしているが、魅音はまったく手をつけていない。

「いや、圭ちゃんの説明も分かりやすいんだけどね、この問題数字使ってないじゃん?」

「あのなく、算数やってんじゃないんだからな。年長者なら数学ぐらい出来るだろう?」

ちりーん……ちりーん……。

校長先生のチャイム代わりの鐘になる。つまりはこれで授業は終了、魅音はニンマリとわらっている。

（コイツ、そろそろ終わるの分かっているやがったな……）

「それでは委員長、号令を」

「起立、礼!」

魅音の号令の後子供達が帰って行く、本当は部活があるらしいのだが今日は明日の新人のために魅音がいろいろと考えるらしいので、お開きになった。

（部活って何するんだろ? まあ明日になれば分かるか……）

「じゃあな沙都子、梨花ちゃん。明日は覚えてろよ」

「また返り討ちですわ」

「また明日、なのですよ」

梨花と沙都子は家が反対方向なので他の三人とは帰る事はない、いつも二人だけで帰っている。

田舎道を二つの影が歩いている、まわりはヒグラシが鳴き、空は

茜色に染まっている。

「梨花、はやくしませんと、特売が終わりますわよ」

「そんなに走ると危ないですよ」

梨花と沙都子は夜ご飯の買い物のため、家路を急いでいた。

「兄貴！ 早くしねえと、特売がおわるだろ！」

「はあ、そこまで焦る必要もないだろう」

その途中、白くて綺麗な家の前には、今朝会った双子の兄弟が。

「だああゝゝゝ！ なんで兄貴は時間にルーズなんだよ！！」

「ルーズじゃなくマイペースなんだ……」

「結局は同じだろ！！ ……ん？」

そんな喧嘩の中、沙都子と梨花に気付いたようだ。

「沙都子に梨花。ああ、そうか今帰りか。早いな」

「多久矢さんに辰也さん。あなた方も特売狙いなんですか？」

「俺はいいというんだが、こいつがな」

ため息混じりに語るこの青年は九条辰也。引っ越してきた九条兄弟の兄にあたる。

「だから、金があっても無駄使いするなっての！」

そしてこちらの圭一に似ている喋り方、九条多久矢。辰也の双子の弟である。

「そうですわよ、お金は出来るだけ節約ですわ」

「わかったわかった、急げばいいんだろ」

「沙都子、ボクたちも急がないと」

「そうですわね！ 早く帰らないと！」

「なんだったら、鞆ここに置いとくか？」

多久矢は一通りこの雛見沢を知っているため、どの程度時間がかかるか分かっているため、カバンを預かっておこうかと提案する。

（たしかに今から帰っては、間に合わないかも知れませんか…

…）

「かまいませんわ、このくらい。」

「沙都子。せっかくだからお言葉に甘えましょうです。」

「でも梨花」

「二人は信用できるのですよ？」

「そ、そういう意味で言ったわけではありませんわ。分かりましたわ、ではお言葉にあまえて」

「了解。じゃあ帰りにな」

「それじゃ皆さん、早く行きましょう」

「出発なのです」

こうして4人で向かうことになった沙都子と梨花であった。

セブンスマート。……雛見沢から約一時間、興宮にあるスーパーだ。雛見沢の人は大抵ここに来る。そして……。

「多久矢さん、その豚肉をお願いしますわ」

「了解。100か200か？」

「100gで結構ですわ」

傍からみれば兄と妹のお使いに見えるだろう。だが実際は明らかに姉と弟であった。

「だからこれは違いますわ、これはニラですわよ！」

「ネギもニラも似たようなもんだろ？」

「違いますわよ、味も使うところも」

「いいじゃねえか、同じ草だ草」

今回は沙都子と多久矢に任せると辰也と梨花は別々に買い物をしている。

「それはしろ味噌ですわ！ 私が言ったのはあか味噌ですわよ」

「味噌には変わりないだろ？ だいたい適当で……」

「多久矢、誰が金を出すと思っている？ ああ、お前が払ってくれるのか、ありがたいな。ごちそうさま」

皮肉を織り交ぜて語るのが得意な九条辰也。この言葉に多久矢は……。

「いっ！ 分かったよ言う通りにするよ」

どうやら財布の紐は辰也のものらしい。

「辰也の言葉には素直なのですよ」

「コイツは俺より弱いからな」
「いつか越えてやる……」

そんなこんなでお使い終了。沙都子は明らかに疲れ果ててる。

「多久矢さんと居ると疲れますわ」

「俺も疲れたよ、何度も取りに行かせるし」

「それは貴方が間違うからではありませんの？」

嫌そうな顔をしているが明らかに嬉しそうなのは良く分かる

「まあ、今日は鞆のお礼に作って差し上げますわ」

「いいのか?! サンキュー。でもよ、迷惑じゃねえか？」

「まあ、たまには俺にも楽をさせてくれ、それともお前が作るか
?」

「降参です」

「なでなで、なのですよ」

辰也には逆らえない多久矢だった。

「ふう、着いた着いた。疲れたなー、流石に遠いな興宮は」

「でもこれからはほぼ毎日通わなくてははいけませんのよ？」

「だが良い運動にはなるからな」

そして初めて沙都子は二人の家に上がった。できたばかりの家なので埃一つない綺麗な家である。

沙都子は玄関を上がった際、靴がない事に気付き、疑問に思う。
両親は居ないのだろうか？

「お二人の親御さんはどうしてなさるんですの？」

「ああ、俺たちは親が居ないんだ」

それを効いた途端に、しまったという顔をした沙都子。

「ごっ、ごめんなさい。知りませんでしたから」

「ああ、気にすんな。俺たちは気にして無いから」

「けど……」

「悪いと思うなら、うまい飯を頼む……」

辰也はぶっきらぼうに答えて部屋に上がっていった。

「任しておいてくださいですわ、最高の晩御飯にしてみますわ」

「おう！ 頼むぜ、沙都子」

その日は最高に美味しい野菜炒めだったと多久矢は語る……。

「どうなるのかしらね……」

その明るい輪から外れ、少女は一人空に向かって呟いていた。

第貳話 「闇と病み」

次の日、とうとう九条兄弟が転校してくる。みな意気揚々と待っていた。

「沙都子、その兄弟まだこないのか？」

「辰也さんは時間にルーズでらっしゃいますから」

沙都子が言う辰也ってどんな奴なんだろう？ 仲良くできりやいいけどな。

「まあ、タクちゃんは早いけどたっちゃんがね」

はやくその兄弟に会いたいのだがまだ来ないな……。

「あっ！ 来ましたわ」

外を指差しながら沙都子が声をあげる。見てみると確かに二人、学校に向かって歩いている。いや、片方は走っているが、片方は歩いている。

「走っている方が弟の多久矢さん」

「歩いているのは兄の辰也なのです」

二人が分かりやすく説明するが、二人とも同じ顔じゃ分かんないぞ？

「兄貴！ 早く歩けっの！」

「まだ時間ならあるだろう？」

「10分前行動が基本だろう！？」

廊下のほうから声が聞こえる、どうやら、ものすごく対象的な兄弟らしいな。

「早く来ていただかないと困りますわ」

沙都子がブツブツと唸っている……ああトラップか。

「沙都子……まさか今日トラップが無かったのって」

「当たり前ですわ。今日のメインはあちらですもの」

その兄弟に感謝しなければな、けどかわいそうに……。

そのとき勢い良く教室のドアが開いた。

（やりましたわ！）

沙都子がガッツポーズをとるが……。

「甘いな」

入って来たのは兄の方、頭上からは黒板消し。それを横にずれて避ける。だが、さらに上からヤカンが三つ、さらに後ろからタライ、下には縄跳びと水入りバケツが二つか。

「痛い！？」

ヤカンを避けた後、タライは後ろに居た弟を盾にした！？

その後、足元を見ながら縄跳びを避け、何食わぬ顔で教室に入ってきた。教室中から歓声が上がる。

「すげー！ 沙都子のトラップを全部避けやがった！」

「腕は衰えてないみたいだね」

「さすが辰也なのです。にぱ☆」

「すごいんだよ！ だよ！」

だが沙都子は信じられないという顔で。

「ありえませんか~~~~~！！！！！」

悲鳴を上げていた……。

「こら！ 北条さん、またあなたですか！」

後ろから来た知恵先生が沙都子を叱るが本人は知らぬ顔。なにより。

「かまいませんよ先生、罠には嵌ってませんから」

こう言われてはさすがに何もいえなくなってしまう。それにしても、何度見てもそっくりだな。違いといえば……あ、目が違うな。兄のほうは赤いし弟は青だ。これなら分かりやすい。

「俺は嵌ってんだよ。 大体な避けるなら自分の力だけで避けろよ！ 人を使うな！」

「使えるものは何でも使わなければな。生きてなどいけないぞ？ 多久矢」

「それはヘリクツだ！！」

いきなり兄弟喧嘩か、けど弟の方は気が合いそうだな。

「とにかく自己紹介だな！ 苗字は九条、俺の名前は多久矢ってんだ。皆よろしくな！」

青い瞳の弟、九条多久矢か、覚えやすい名前だな。

「俺は九条辰也、ここにいる愚弟の兄になる。コイツが皆に迷惑をかけると思うが、我慢してくれ。以上だ」

随分と大人びたというか、大人？ てか女じゃないか？ あんなに綺麗な男見たことないぞ。

「それでは二人は後ろの開いている二つの席に座ってください。」

二人が後ろに来る、てか女子の皆顔が赤いぞ！ 皆、今日熱があるんじゃないのか！？

「お！ 沙都子と梨花。今日からよろしくな」

「なぜ先に入ってきてませんでしたの！ あなたでしたら避けられないハズでしたのに……」

「いやいや、おれは一発食らったぞ？ 愚兄のせいだ」

「なら俺の手を払えるようにならなければな」

この兄弟って仲悪いのか？ 喧嘩ばかりしてるようだけど……。

「ほら皆さん！ 授業を始めますよ。委員長、号令お願いします」

「きりーつ、れい、ちゃくせーき！」

魅音の号令で、授業がはじまる。どうやら頭は相当良いらしい、二人とも凄いスピードで書いていく、って、もう終わりか！？

「ちっ、兄貴より13秒遅かったか……」

こいつら何モンだ？

「いや、流石九条家党首だね、オジサン見直したよ」

「けどよ、俺を身代わりにするのはどうかと思うぞ」

昼休み、みんなで給食を食べながらいろいろ話をしていた。たしかに多久矢と圭一は話し方がよく似ている。

「ちょうど後ろに居たからな、生贄だ」

「でもあのトラップを避けるなんて信じられませんか」

沙都子はまだショックが大きいのか、顔を膨らませ文句を言っている。

「はう、膨れてる沙都子ちゃん、かぁいいよ」

「お持ち帰りは犯罪だぞ」

釘を刺さないと大変なことになる、友達を犯罪者にしたくない、せめてもの心遣いだ。

「確かに良いトラップだが、時間差が在りすぎる。もし確実に仕留めたいなら、相手が避けた場所に避けた瞬間に当たるよう工夫するんだな」

いやそれは確実に俺が餌食になる。

「にぱ☆」

梨花ちゃんが俺をなでている。次は俺が食らう番ということか……。

「いつか兄貴を生贄にしてやる」

多久矢は息巻いている。

「そうそう、今日終わったら部活だから残ってね」

「部活？」

俺は知ってるが二人は？ のリアクション、それに答えるように魅音がフン！ と鼻を鳴らし

「そう！ 部活とは！」

「皆でゲームをして遊ぶのです」

「最初くらい言わせて」

魅音ががっくりと項垂れる。どうやら色々と説明を用意していたらしい……。

「ああアレか」

「多久矢は知ってんのか？」

「違う違う、事の発端に居ただけ」
事の発端？

「ああ、あれか……」

「と、とにかく！ 終わったら残ってよ！」

なにかあったのか？ 魅音は顔を赤くしながらムキになっている。
なにかあったんだろうか？

「悪いが俺は無理だな」

そこに辰也がまた無愛想に答えた。

「えー、なんでさ？」

「男の事情というやつだ」

「なに？ 女にでも会いに行くの？」

「良く分かったな、その通りだ」

「……………」

微妙な空気が流れた……。

「あ、あははは、そ、そうかゝ悪かったねゝオジサン気付かな
くって」

「分かるやつも居ないだろう、キツイ香水つけているわけじゃ
ないからな」

「ああそうそう、俺は残るからな！」

どうやら今日は辰也は抜きで部活らしい……というかいきなり
女遊び？ どんな奴かさっぱり理解できないな。

そして放課後、他の生徒は帰り、部活メンバーだけが残った。

「さて、それじゃあはじめようか！」

「で？ ゲームってなにすんだ？」

「そうだねゝ、じゃあ簡単なのでババ抜きから始めようか……」
ババ抜きなら在る程度は運任せだからな……大丈夫だろう。

「都会のモヤシっ子に私達が負けるはずありませんわ」

「みゝ、がんばるのですよ」

「まゝ勝てないだろうけどね」

カチン！

二人の男に火が付いた。

「魅っちー、良い度胸だな……」

「やるからには、勝つ！」

数分後……………

惨敗という結果になった。

「魅音！ お前イカサマか！」

「なに！？ 多久矢、どういうことだ！」

「いいか圭一、このランプの裏面、同じ傷や汚れが無い。ということは」

「傷で絵札を認識してる！？」

そうか！ だからこいつら迷わずに札を取れるんだ！

「あっはははははは！ よく気づいたね。まさかこんなに早く気付くとはね」

「気付いたからには容赦しねえ！ 圭一！ 一気に挽回だ！！！」

「おう！！！」

どうやら熱き友情が生まれたらしい……。

「二人とも返り討ちですわ！」

「ふぁいと、おゝなのですよ」

「がんばるんだよ、だよ」

敵に応援されると言う状況で何とか挽回するため一揆奮闘する二人だが。

「これがクローバーのKですわ」

「これであがりなのです」

「くっくっく、ごめんね圭ちゃん」

ここまできたら最後にやることは一つ……。

「最後は私と一騎打ち。勝てば圭ちゃんの優勝、私がビリ。どうかな？」

まさに破格の提案、これに勝てば、おれの勝ち！

「ルールは？」

「ここにカードが二枚、圭ちゃんにはジョーカーを引き当ててもらう。ジョーカーを引いたら圭ちゃんの勝ち。分かった？」

つまり確率は二分の一、勝てるか？

「両方違うって事は？」

危ないのはジョーカーを引き当てると言っ、て、ジョーカーが無い場合だ。

「引いたらもう一枚も見せるよ、それなら良いでしょ？」

よし、なら行けるか？ どちらだ？

「まっ、てくださいまし、あの傷はクロバーの……モガモガ」
慌てて梨花ちゃんが沙都子の口を押さえる、確かに左には見慣れた傷。

アレはクロバーの8だ。あんな分かりやすい傷のカードなんて……いや。ここで焦るのは良くない。クールになれ！ クールになれ！ クールになれ！

「圭一、大丈夫か？」

「ああ、全然大丈夫だ！ 魅音！」

「分かった？ 圭ちゃん？」

「お前はミスを犯した、この左のカードはクロバーの8。」

「そうだね、だね」

「けどおかしいんだ、あんな分かりやすい傷のカードは右がジョーカーだと言っている。魅音がそんな事をするはずが無い。という事は……」

「そうか！」

多久矢も閃く、そう……。

「ジョーカーの上にクロバーの8をのせたんだ！」

静まり返る教室、魅音がまるで降参というように笑った。

「まさか、ここまで見透かされるとは、見くびっていたよ圭ちゃん。」

「けどホントは右がジョーカーなんだけどな」

「んが!!」

俺は右のカードをひっくり返す。そこにあるのは間違いなくジョーカーだ。

「な、なんで〜!」

「まずあからさま過ぎたんだ。あんなに分かりやすいカードだす、つまりわざと分かせて本人の疑心を煽るんだ、そして何より沙都子!」

俺はビシッ! と沙都子のほうを指差す。

「な、なんでワタクシですの〜!」

「お前がヒントを言ったことだよ。おまえがあんな重要なヒントを言うわけ無いからな!」

その偽情報や本当の情報を見れば、おのずと答えが出る。

「でも圭ちゃん、圭ちゃんが言ったみたいになるとは考えなかったの?」

「もしジョーカーにクローバーの8を被せてイカサマだと言われるかもしれないだろ? だったら正々堂々とたたく奴だよ、魅音は」

「圭一君、100点かな、かな」

「み〜、圭一の圧勝なのです。にぱ☆」

「すげえ〜なく圭一、見直したぜ」

「まあわたくし達相手にするのならこれくらいが普通でしてよ!」

とりあえず皆に褒められて、今回の部活は俺の勝ちだ!

「おめでと、圭ちゃん」

「おい魅音、罰ゲーム忘れてんぞ?」

「ぎゃ!」

その日魅音はメイド服で帰宅。南無阿弥陀仏。

「いやゝ多久矢のお陰で助かったぜ」

圭一・魅音・レナは、いつものように田舎道を歩いていく。

「何？　なんかしてたっけ？」

魅音が疑問顔で聞いてくる、まあ助かったって言っても少しだけだけ。

「早めにイカサマって気付いたら？　それのお陰さ」

「じゃあ圭一君は多久矢君が居なかったら負けていたんだね、だね」

レナの考えには激しく同意、多久矢が引越して来てなければ、俺は確実にこのメイド服を着ていた。

「けどさ、辰也の奴いきなり女遊びって、大丈夫か？」

転校初日に友達のを誘いを断って女に会う、すこし違う気がする。

「ちがうちがう、圭ちゃんは誤解してるよ」

「うん、レナもそう思うな」

レナと魅音に同時に否定されるとは……けど本当だと思うんだがな。

「なにを誤解してるんってんだ？」

「あのさ圭ちゃん？　転校していきなり彼女とかはできないでしょ？　確かにたっちゃんは顔がいいけど、今まで彼女の話なんか聞いたことないよ」

そうか、そう言われればそうだ。いきなり彼女が出来るなんてこと……ないなんて事はないと思うけど。

「じゃあもし出来たら？」

「それはないよ、たっちゃんはね、一定以上の位置に人を入れないの」

距離を取るって事か？　それとも精神的な意味か？

「それはレナも感じたよ、たぶん不安なんじゃないかな？」

「たぶんね、ま、詳しい話は分かんないけどね」

そして分かれ道で二人と別れた。

二人の言う通り、辰也はすでに家に居た。多久矢が帰ってくるのを待っていた。

「ただいまー」

多久矢が学校から帰ってきた、そしてリビングに向かうと、紅茶を飲んでいる兄貴が居た。俺は兄貴が飲む紅茶がいまいち好きになれない、匂いが気に入れず兄貴を不機嫌にした事もある。

「兄貴ー、どうだった？」

「どうやら当たりらしい」

「やっぱり？」

兄貴は話を済ましたらしい、けど今日のアレはやりすぎだろ。

「兄貴、たまには部活しろよ。女って聞いてみんな引いていたぞ」

「べつに、好かれようとは思わん」

これだよ……兄貴はとにかく物事に無関心だ。

昔から親父の影響かジジくさい。けど親父とは似ていない。不思議だ……。

「そうそう俺さ、今からレナと一緒にごみ置き場いってくるよ」

「なんのために？」

「レナと約束でさー、レナ曰くかぁいい物の為だって」

「物好きだな……捨てられたものに手を差し伸べるとはな」

まうたこいつは、かわいくないというかなんというか……。

「ま、人それぞれだろ？」

「なら俺は興宮に行って来る」

「なにしに？」

「ほかにも色々することがある、じゃあな」

兄貴はそういつて出て行った。

兄貴はよく誰かと話をするために外に行く。だが誰と会ってい

るか分からない、仕事上必要な人たちであることは確かだ。

「いけね！ 早く行かなきゃ！！」

時計を見ると、帰るのに時間をかけ過ぎたみたいだ。随分時間が経っている。

俺はタオルだけ持って家を出た。すでにうるさいほど鳴いていたセミは、静かなヒグラシの合唱に変わっていた。

ごみ置き場に着くと圭一がうずくまって本を読んでいる……？

あれは本？ なるほどなるほどお。お宝な本って訳ね。

俺はこっそりと圭一の後ろに近づいて……。

「けーっいち！！」

「うわあああああああ！！！！」

いきなり絶叫する圭一、俺のほうがびっくりする。

「な、なんだよ、そんなに驚くことか？ あ！ それともイイ本でも見つかったか？」

だがそれはすぐ勘違いと気付く……『雛見沢ダム、リンチバラバラ殺人』……そう書いてあった。

「い、いやこれは違うんだ！」

なーにが「ちがうんだ」だよ。

こいつがこういうのを見てるって理由はすぐに分かる……。おそらくは誰かの井戸端会議でも聞いたんだろう。でもそれでこんな本を読んでるって事は、仲間や友達を信用できないってことだ……。おそらくは連続怪死事件の事だろうが、この村の連中は関係ない。だがこいつは疑っている……。仲間を、友達を疑っているからこまでうろたえる。こいつが何を考えているか、手に取るように分かる。俺は別に誰が何を言おうが構わない。けど、あれだけ皆と楽しく過ごしておいて、疑っている。それを目の当たりにすると怒りの感情がでてくる。

「俺も怪しいか？」

「え？」

「俺も信用しきれない奴に見えるかって聞いてるんだよ」

たぶんこいつの答えは分かる。

「そ、そんなこと……ねえけど」

ほらな“けど”っていう……。けどってことはほかに何かあるときしかつかわねえ。

「あれ？ 多久矢君？」

後ろを見るとレナが鉈を持って立っていた……何か物を取るためだろう、もしくは圭一のためか。

「そっか……まあがんばれよ」

俺はそんな気になれない……。ちょっと熱くなりすぎた。

「帰っちゃうの？」

「わるい……今日兄貴の代わりにご飯のしたくしなきゃ」

俺は苦しい嘘を吐きながら、その場を後にした……。

情けない。兄貴ならこういだろう……だが圭一には失望した。ただそいつらの住んでいる村で殺人があった、だからってそいつらを疑うのはお門違いもいいところだ。

てめえだって人に言えないこととか無いのか？ 無いなら立派だな……。

俺はそんな心を落ち着けるために川原に向かった……。

川原に向かう途中で見慣れた車が……警察だ。

「なにか事件か？」

事件もないのに……いや、来るな。この雛見沢には、かならず来る警察が……。

「おんやゝ？ 見慣れない方ですね」

大石 蔵人……この雛見沢じゃ知らないやつは居ないな。

「つい先日引っ越したんです、九条多久矢です」

「これは丁寧にどうも、大石蔵人ですよろしくお願いしますね………修羅さん？」

ぴくり、と反応してしまった……マズイ、こいつ俺たち狙いか？
「九条ですよ？ 修羅って……失礼ですね」

今更な芝居をする、相手も乗ってくれたが……おそろくわざと

気づいてない。

大石か、役者だな……。

「それじゃこれで……」

居心地の悪い空気に負けてその場から逃げ出すように口を並べる、俺は大石を横切って家に帰ろうとした……。

「あんたら……じゃあ、ないですよね？」

奴の言葉が俺を捕まえる……逃がさないとはかりにガツシリと……。

「なんの話ですか？」

「連続怪死事件ですよ、しってるでしょ？」

「しってますけど、俺はその事件には関係有りません……」

「なら別の事件なら関係ありますか？」

チッ。しまった……まだ、またヘマをする。

「あるわけないでしょう？ ただの学生が……」

「まあ信じましょう……何かあったら連絡くださいねえ？」
なにかあったら？ ……ふざけた言い方だ。

「失礼……」

俺は川にも行かず家に帰ってきた、出かけなければ良かった……。

「大石……食えない奴だな……」

俺はご飯も食わず、その疲労感に任せて眠りについた……。

「明日……学校………休もう」

眠るときだけはあの蛇が巻きついてくるようなような不快感を感じずに寝られる……。

第参話 「亀裂」

放課後の部活……昨日のせいか気乗りしないが、しかたない。怪しまれたくもないし……な。

「さて！ 次は何にしようか！」

魅音は今日も元気そうだな、今日の部活は今のところ圭一の圧勝……いい気なもんだ。仲間を信用できない奴が何故あそこに居れるのか不思議だな……。

ふむ……、すこし考えが病んでるな……。自重しないと。

「うおおおお！ これであがりだっ！！！」

また圭一が一番にあがる……今日は兄貴が居ないし、俺はこんな調子だ。圭一が勝ち続けるのも頷けるがな……。

「魅音、風がヌルいぞ！」

魅っちは格好がスクール水着、羽扇子で圭一を扇いでいた。顔には悔しさがにじみ出ている。

「沙都子！ お茶」

「くっ、はい……お兄ちゃん」

沙都子と梨花は動物の耳を付けてさらには、沙都子が妹口調という注文まであった。

「けい……ご主人様……、あんまり頭を動かさないでください／＼／＼／」

レナはというと、体操服ブルマで膝枕、メイド口調……趣味の悪いこった。

「はぁ、この世の天国だなあ」

イライラする、仲間を信じられないくせに目の前の幸福にはしがみつく……。

「俺様無敵！ 天下を得たり！！」

ドンッ！！ ガタッ！！

俺は机を叩き、立ち上がる。

「悪い……帰るわ」

空気が冷めた……そりゃそうだ、俺が冷ましたんだから。

「た、たくちゃん？　どしたの？」

「悪いな、魅うちー」

俺は魅音の頭を少しだけ撫でてから、教室を出た……

ただ憂鬱だった……ただただ頭の中がムカムカする。圭一を見ると腹が立つ……。

「多久矢？　今帰りか」

ちようど兄貴と出くわした、兄貴は勘がいい、おそらく気付く。

「ああ、今帰りだ……」

「何かあったか？」

ほらな……兄貴は勘が良すぎる。けど、今はそれが心地いいな。

「帰ってから話すよ……」

兄弟二人で家路についた。

兄貴は帰ってから話すという言葉信じて何も聞いてこない。

「何も、聞かねえんだな……」

ピタッと足を止めた兄貴は、いつもの様に興味の無い顔で

「お前が言ったからだ、帰ってから話すと言っただろ？」

こう言った。

兄貴はやさしい……自分では厳しくしているつもりだろうが、

兄貴はやさしい。

だから頼ってしまう。あの日からずっと……

家に帰ってすぐに、俺は頭からみずを被った。少しは頭が覚め
たみたいだ

「それで？　なにがあった。お前らしくも無い……」

タオルを持ってきた兄貴は、やさしい言葉の裏に、追求の言葉を
混ぜ聞いてきた。

「いや、たださ……圭一の事で……」

俺は兄貴に全部話した、ごみ置き場で圭一が週刊誌……『雛見

沢リンチバラバラ殺人事件』を調べていたこと……仲間を信用出来て居ないこと。

「そうか……まあ、圭一は俺やお前のように利口じゃない。仕方が無いさ……」

「けど……」

納得できない。

「それより………今日だぞ？」

「ああ、分かってる」

綿流し……いや、“腸”流しだ。

通称『雛見沢連続怪死事件』

個々に解決している事件だが、世間は“連続”と名づけている。俺たちは多少の真相を握っているとはいえ、証拠は無い。実際は迷宮入り、だろうな。

それが今日の綿流し祭り。今日誰かが死んで誰かが消える……。

「兄貴は行くのか？ 綿流し」

「いや、正確には別の用事だな」

また……仕事か。まあ聞けば教えてくれるだろうけど、興味もないしな。

「とりあえず祭りには行くんだな？」

「ああ、本当ならもう少し早くに済ませる用事だったが、すこし遅くなった」

そう言いながら、兄貴は荷物をまとめ、出かける準備を整えていた。

「俺は……金だけでいいか……」

祭りの会場は人で賑わっていた。見ると部活メンバーも来ているようだ。相変わらず馬鹿騒ぎが好きな連中だ。だが俺たちは別の用事だ。

兄貴が呼び出されたらしい……誰かが分からないが、仕事の依頼かもしれないと兄貴と俺は古手神社“祭具殿”に向かった。

足取りは重い、兄貴も氣を使つて足を遅くしてくれている……風邪でも引いたか？ 体がダルイけど、文句も言えない。しばらく歩いて祭具殿に着けば人影があつた。診療所の看護婦、鷹野三四だつた。

「呼んだのはお前か？」

「ごめんなさいねえ、せつかくのお祭りを邪魔しちゃって」

「いや、祭りには興味が無い、随分と前から連絡は来ていたが、色々仕事を立て込んでいてな、遅くなつてすまないな……」

「かまわないわ、今日までに来てくれれば良かったのだから……」

眩暈がする……兄貴と鷹野の声も遠くに聞こえる……。

「それより彼、大丈夫？　気分悪いみたいだけど……」

気分が……悪い……。

「多久矢！！」

俺はその場で倒れた、ただ傍で叫んでいる兄貴の声が聞こえただけだった……。

夢を見た……。○

俺が仲間を殺す夢、笑いながら一人また一人と、殺してゆく……

俺が？　ありえない。圭一ならともかく、俺は殺さない。殺すこともないんだ！

違う！ 違う違う違う違う違う違う違う！

俺じゃあああないいいい！！！！！！！！！！

「!!!」

目が冷めたらそこは、いつもの家、俺の部屋、俺のベット。

「目が覚めたか？」

兄貴が部屋に来た……どうやら一日はたつたらしい。

「わりい、ちよつと無理してた」

「気にするな、ちょうど傍に看護師が居たからな」

鷹野のことか、アイツの事はきらいだが、感謝しなくちゃな。

「で？　話は大丈夫だったのか？　俺のせいで……」

「いや、話はすんだ。ただ監視だ。」

「監視？ まさか祭具殿の？」

「ああ、忍び込んだ。なにがあるかは、知らんがな、どうやら余程見たかったらしいな」

「兄貴は入っていないのか？」

「興味がない。だいたい入りたいなら、誰にも知られないようにするのが普通だろう？」

年寄り連中が聞いたら殺されるゾ……。

「とにかく今日は休んでおけ、学校には連絡してあるから」

「それより、昨日……あつたのか？」

「あつた、鷹野が死んだ」

え？……なんで……それじゃ……。○

「お前に点滴打ったあとに死んだようだ」

「もう一人は？」

死んだって分かるって事は、消えたやつがいる……いや、そいつが犯人の可能性が……。

「富竹ジロウ、フリーのカメラマン。もう一人の死人だ」

な……に？

「なんでだ？ いままでそんなこと……」

「なかったな……ということは消える人間も二人になる可能性が出てきたな」

マジかよ……。

「だが、世間は鷹野の死を隠している。何故かは分からないが、鷹野三四は行方不明扱いだ」

「なんで、わざわざ行方不明に？」

「さあな。人の都合など考えていられない」

多久矢は外を見た、晴れた青空に山が見える。こんな平和そうな村でまた事件、しかも今年は二人？ 消えるのも二人……か？

「ま、今日一日は安静にしているよ？」

兄貴はおかゆと洗面器に水・タオルを置いて学校にいった。暇なので下にテレビでも見に行こうと思い部屋を出た、階段を下りて行く……。

ひとりで居ると考える時間が増える、テレビの音など入って来ない。今回の事件、おそらく富竹と鷹野が殺された理由。

今までの被害者との共通点は『余所者』か？ いや違う、良く考えてみる。一年目は“工事現場の監督”理由は“村をダムで沈めようとした男”

二年目は“ダム賛成派”確か北条……沙都子の両親だ。理由は“村がダムに沈むのを肯定した”こと。

三年目は古手神社夫妻……“北条を助けたから”殺された、四年目は沙都子の叔母と兄貴……兄貴が叔母を殺したと言われている

が犯人は別に現れて刑務所で自殺、沙都子の兄貴は失踪……。

……そして今年。鷹野三四と富竹ジロウ、二人とも死亡で理由が無い。あるのは『余所者』というだけだ……いや、まず何故隠した？ “鷹野だけ行方不明”にするのは？ 理由は？ 誰だ？ おそらくまだ事件は終わってないはず。

「まったく、毎回毎回よくやるな……」

あとはだれが消える？ ただ祟りを再現するなら、俺か兄貴か圭一の家族……可能性はそれくらいか。

「まだ材料が無いな……風呂にでも入るか」

俺はシャワーだけ浴びて汗を流した、流れてゆくシャワーに血が混じっているように見える、重傷だな……。

さっぱりしたようなしないような変な感覚だがさっきよりはマシか。風呂上りに麦茶を一気飲みする、胃に入ってくる冷たい感覚が心地いい。

もう一度寝よう、体は楽になったといえまだダルい。部屋にもどってもう一度、夢が見たいと思った、優しい夢が……。

ピンポン♪

チャイムの音で目が覚めた……だれだ？ 俺は重い足を動かして玄関に行く。

「はい？」

「こんにちわ、なのです」

「ご機嫌ようですわ」

みると沙都子と梨花ちゃんが立っていた、そうかもう学校終わったのか……。

「綿流しの時から風を引いていたらしいですわね」

「みんな心配してるのですよ」

心配……ね。

「そりゃあ悪かったな。あれ、兄貴は？」

学校が終わり二人が来たなら兄貴も帰ってくるはずだ、けど兄貴は居ない

「辰也さんでしたら、今日は興宮で仕事があるから明日の朝帰るらしいですわ」

なるほど、また仕事か……熱心なこった。

「だからその代わりに沙都子が看病しにきたのですよ」
へ？ 沙都子が、か？

「り、梨花！？ べつに私は……」

「でも多久矢はおながが減ってにゃーにゃーなのですよ？」

「ああ、腹は減ってる。昼から何にも食って無いから」

おかゆは食ったがあんまり量がなかったし、腹はぺこぺこだ。作ってくれるならありがたいな。

「それじゃあお邪魔するのですよ」

「お邪魔いたしますわ」

今日の飯は美味くなりそうだな……俺はなんとなくそう思った。せめて俺の力で、仲間は守ってやりたい。

「この時間に来たってことは、部活は無かったって事か？」

先ほどまで笑っていた瞳は伏せられ、それが事実だと語られる。

「みる、圭一は最近特におかしいのですよ」

「梨花！ あんまり人のことを悪く言うのは……」

「いや気にすんな、なんとなく分かるから……」

その日は確かに美味しいご飯だろう。けど、美味しい食卓ではなかった……。

すこし……、頭痛が酷くなった……。

第肆話 「不安」

美味そうな匂いが漂ってきた、沙都子と梨花ちゃんはずいぶん家事になれていた。

「美味そうだな、まだ出来ないのか？」

「もう少しがまんなのですよ？ つまみ食いはダメなのです」
感づかれたか……梨花ちゃんは昔っから狸なんだよな。

「俺は何か手伝わなくていいのか？」

「男子、厨房に近寄らず。ですわ！」

まあ沙都子は楽しそうだし、良いか……。

「多久矢、すこし内緒話なのです、いいですか？」

言葉に強い意志を感じた。俺は頷き、リビングのソファに座り、話を聞いた。

「何だ？ 梨花ちゃん。話って」

「多久矢にお願いなのです、沙都子の兄代わりになって欲しいのです」
……………。

「圭一じゃ駄目なのか？」

見ていれば圭一と沙都子こそ本当の兄妹に見える、俺が入る必要も無いと思うが……

「もう……この圭一はダメなのです」

「この圭一？ どうゆう事だ？」

「なんでもないのです……多久矢、お願い出来ませんか？」
なにかありそうだな、この顔。まあ俺も沙都子の事は嫌いじゃない、だが“俺のような存在”が兄代わりでいいのか……。

「梨花ちゃんってさ……俺たちの本職知ってるよな？」

「はい……しってますです」

「そうか、いいよ。そこまで信用してくれるなら、沙都子の兄代わりになってやる。もし沙都子に何かあったら守ってやる……全

力で」

その瞬間、梨花ちゃんが泣きそうになっていて、少しびっくりしたが泣きはせず、ただ……。

「ありがとう」

それだけ伝えられた……。

「さあ！ できましたわ、二人とも何をしてるんですの？ 運ぶくらいしてくださいませ」

「ああ悪い今行くよ」

梨花ちゃんと台所に向かう……そこにあったのは世界一と言えるほどに美味い『野菜炒め』だった……。

「いっただっきまーす！」

ひさしぶりになにも考えず、ただ素直に笑えた。沙都子や梨花ちゃん……魅音やレナ、そして……圭一。皆がいてこそ楽しい時間と言えるのだ……少し、いや随分と癒された気がする。

圭一の事は嫌いだが、悪い奴じゃない。今度あったら、謝ってやるか……。

食後に俺は買っておいたプリンをだして三人で食べていた……そしたら不意に沙都子が。

「それより多久矢さん、この前いきなり教室を出て行ったの何故ですの？」

なんて聞くもんだから、少し戸惑った。

「いや、風邪の引きはじめと、少し敗戦続きでむしゃくしゃしてただけだよ」

もっともらしい理由を並べて逃げにはしる。俺がイライラしてたのは、圭一のせいだ……アイツの……アイツが週刊誌を読んでいるところを見てから、イライラしすぎた。

「圭一さんの事ではありませんの？」

本日ビックリ二回目だ。……ここまで勘がいいとは、いや俺が

露骨過ぎたか……。

「まあそうだな、それもある」

「圭一さん、最近おかしいんですのよ、挙動不審と言うか……百面相と言うか……」

ああ、たぶん自分の疑心と理性のせいで顔が落ち着かないのだろう、良くわかる。

「まあ、明日一日休んで、あさって圭一の様子見に行ってくるからさ」

心配するなよと言いながら沙都子の頭を撫でてやる……。

「た、多久矢さん！　そうやっていきなりレディの頭を撫でるのは失礼ですわよ！」

それが照れ隠しだとは分かるが、ここはこっちが引き下がろう。

「それじゃ、どうしても頭を撫でたいんだが、いいかな？」

「うっ。……ま、まあどうしても言うならかまいませんわ」

心なしかさつきよりも嬉しそうだ……。

「みる、沙都子だけズルイのです」

「分かったよ、ほら」

ナデナデ……二人の頭を撫でてやる。

まあこういう日も悪くない、かな。

「そろそろ遅いですし、これで失礼しますわ」

見れば確かに、もう遅いな。

「送っていいとか？」

「みる、多久矢よりも僕たちの方が詳しいのですよ？」

「まあ、そうかも知れないが、やっぱり危ないだろう」

「多久矢さんに送ってもらおうほうが何倍も危ないですわ」

ムカツ……圭一じゃあるまいし。これは少し……いや大分ムカッとしたな。

「沙都子、今度部活があったら覚えとけよ？」

「返り討ちですわ」

売り言葉に買い言葉、だが心地いい会話だ。

「それではお休みなさいなのです。にぱ☆」

二人を見送り、その日はすぐに寝た。

もうあの悪夢は見なかった。

翌日。

俺は入江診療所に向かい、注射を打ってもらった。

ま、今日安静にしてたら大丈夫だろう………ん？ あれは圭一……。

俺と入れ替わりのように診療所に入って行った。あいつも風邪か？ まあどうでもいいけど、とりあえず今日はいいか……明日あいつの家に行こう。すこし気が参ってるみたいだからな。そうだ、兄貴に買い物頼まれたんだ……。

「はあ……病み上がりをこき使いやがって」
仕方ない、興宮に行くか……遠いな。

俺は一人休み休み、興宮に向けて歩いていたら、何回目かの休憩中ふと声を掛けられた。

「あんれえ？ 九条の坊ちゃんかねえか」

「ああ熊さん、こんにちは」

見るといかにも自給自足ですみたいな人、『熊沢 隆吉』さん。皆からは熊さん・隆さんと呼ばれている。

「何でも風邪引いたゆうてましたな、もう大丈夫なんね？」

「いやすこし体がダルイですけど、兄貴に買い物頼まれて、今から興宮ですよ」

「そんならワシの車のつてくたせえ、ふるいけんど歩くよりはマシなんね」

確かにそのほうがいいか……。

俺はありがたく熊さんの車に乗せてもらった……流石に車は早いな。

「ああ帰りは悪いんですよ、一人で帰れますから……」
熊さんは渋ったが何とか帰ってくれた……あんまり年寄りと話すのは苦手だ。

さて……なにから買うかな。

とりあえずセブンスマートで食料品と、途中の店で兄貴が好きなシュークリームを買い、さあ帰ろうかとしたとき、見慣れた後姿……圭一だ。

「アイツ、なんでここに……さっき診療所にいたはずだが……」
まるで自分をつけてるような足取りだな、けど傍にいる奴が悪い……大石だ。

「あの馬鹿……」

ここいらは園崎の経営店が多い、特に大石が傍にいるなら、人から人へ……面白いように話が噂となって伝わっていく。

「まあ俺には関係ないか……」

会いに行くのは明日だな。俺はドライアイスが溶けないうちに家に帰るため、今度は休まずに家に向かった……。

結局次の日は部活は無し、圭一が居ないから。

「まったく、やさしいね。みんな」

「それがこの雛見沢のいいところだ」

兄貴も久しぶりに学校に来たが、無言が多い。まあ兄貴は基本人と話をしないけど……。

「つまんねえ……」

無意識にそう呟いていた……

俺はすぐに教室を出たが圭一は居なかった……走って帰ったか。一度家に帰ったら反対方向だから遠いんだけどな……仕方ないか。とにかくいったん帰って出直そう、俺は走って家に向かいきびすを返すように家を出た。

前原屋敷、ここは建てられる前からそう伝えられた、都会者・余所者である。

ぴんぽーん♪

「はい……」

女の人の声、たぶん母親だろう。

「すいません、俺圭一のクラスメイトで九条多久矢って言います、圭一居ますか？」

「ちょっと、待ってください」

なんか暗いな、なにかあったのか？

出て来た人はやはり表情も暗かった。

「あの、圭一に何か用ですか？」

「ああ、はい最近圭一が様子がおかしいんで様子を見に来ました」

「そう、わざわざありがとうね。あがつてちょうだい」

失礼しますと伝えてから前原家に上がった。

「けーいちー、いるかー？」

部屋に入ると、思いつきりにられました。まるで不機嫌な時の兄貴くらい殺気があるな……。

「なにか……ようか？」

「いんや、ただ様子がおかしかったからな、大丈夫か？」

「大丈夫に見えるのかよ!!」

いきなり圭一は俺の胸倉を掴み、吼えてきた。

「こんな……こんな思いたくないけど、怖いんだよ! いつ殺されるか分からないだぞ!」

重症だな……まあ分からなくも無いけどな、だが始めに疑ったのはこいつが先なんだがそれも関係ないか……。

「話なら聞いて……」

「必要ない! 帰ってくれ、俺は一人で戦わなくちゃいけないんだ」

「わかったよ、けどあんまり心配掛けるなよ?」

「分かってる、この思いが勘違いだっと思っていたい……」

勘違いだよ。と喉まで出掛かった言葉をのんだ、今の圭一には逆効果だと分かるから。

そこまで聞いておれは前原家を後にした、すこし危険だな……。

「一人で戦う……か」

それもまた、本人の意思しだいだな……。

「なにと戦うか、分かっているか？ 圭一……」

そう呟き、家に帰った……。

ゴンメンナサイ……。

圭一が俺に謝っている声が聞こえたような気がした……。

第五話 「嘘と真」

次の日はいつもより早く目が覚めたため、俺は兄貴よりも早く家を出た。

「おはようございますわ！ 今日はいつもとより早いんですね多矢さん」

少し歩いたところで沙都子と梨花に会う、二人も早いんだな。

「何かあったのですか？」

「いやたいした事じゃないよ、ただ少し早く目が覚めただけさ」
二人の言葉はいつものように元気がない……圭一はまだ和解してないみたいだな。

「圭一は相変わらずだな、まったく……」

呟いただけだったが二人には十分きこえたらしい。

「最近まるでにーにーみたいなんですの」

「にーにー？ ああ沙都子の兄貴か」

北条悟史……4年目の崇りにあって失踪した少年、まだ見つかっていない。

この沙都子は今も兄貴の帰りを待っている……だから圭一がせめて兄貴代わりになれればいいと思っていたが、どうやらその役は俺にしか出来ないようだ。

「心配すんな、大丈夫だよ。俺は沙都子の傍に居るから」

頭を撫でながらそう言うと言き出してしまった……。

「もう！ そんなこと……ぜんぜん気にしていませんのよ？」

ただ少し心配なだけですわ……」

「強いな、沙都子は。逃げていない……辛い事から目を背けずにちゃんと受け止めている。それは凄いことだと俺は思うぞ？」

「みー、沙都子。少しは甘えても罰は当たりませんかですよ？」

「き、今日は二人とも意地悪ですわ……けど、ありがとうございますわ。にーにー……」

沙都子は目を拭った後、にかつと笑い。

「さあ二人とも！早くしませんと遅れますわよ！！」

少しは力になれただろうか？ いや、なれたと思いたい。

「大丈夫なのですよ？ 心配しなくても今日の多久矢は200点なのです」

「はは、二人分か……」

まあ約束したからな、梨花。俺は悟史の代わりじゃない、俺は悟史の思いを継いでいる。だから悟史が帰ってきたらとりあえず殴るか……本当に失踪したのならな。

俺たちは三人で手をつないで学校に向かった、離したくない、この小さい手を守っていききたい……そう思った。

学校に着いたら圭一が既に来ていた……ロッカーからバットを出して。

「圭一さん！今日は早いですのね」

圭一はバットを隠しながらあしらっていた、近づくな……そう目が語っていた。

その日も部活はない……今日も圭一は直帰、皆心配しているが関係ないらしいな。

「圭一さん……おかしいですわね……それにあのバット、にーにーのですわ」

「あの馬鹿野郎……」

なにもかもが違う、こんなおかしい。ただ皆楽しく過ごしたいだけ、なのに……。

「これは違う」

この不安はなんだ？ 確実に嫌な事が起こる。そう確信できる嫌な空気。

「とにかく圭ちゃんがないから部活はお開きだね」

魅音もいつものような覇気がない、暗く沈んでいる。

レナは圭一の後を追うように教室を出て行った……。

「僕たちも早く帰りましょうです、ここにいても意味は無いのですよ……」

なんか今日は梨花ちゃんも機嫌が悪いな……言葉の端に嫌悪感がにじみ出ている。

「そう、ですわね……早く帰りましょうですわ……」

特に沙都子は、まるで胸にもものが刺さっているように辛そうな顔をしている……。

「なあ沙都子、今日家に言っていないか？」

「え！ た、多久矢さん！？ どういうことですよ！！」

「いやただな、このあいだ食った野菜炒めがうつまくてなく、また食いたいんだよ」

「それなら別に多久矢さんの家でも……ハッ！」

周りを見れば、ニヤニヤしながら見ている魅音と梨花ちゃん……さらに兄貴も。さっきよりはマシな笑顔だ。

「なくに……？ 二人ともまるで恋人同士みたいな会話だね」

「二人ともラブラブでにゅにゅなのですよ」

「ほう？ それじゃ将来、沙都子は義妹になるのか……」

爆発発言とはこんなことを言うのだろう……俺は顔が熱くて沙都子の顔がまともに見れない。

「さ、沙都子？ その構わないか？」

俺は恐る恐る沙都子の顔を見た、顔が真っ赤でトマトのようだ……。

「仕方……ありませんわね。分かりましたわ……では今日招待いたしますわ。」

皆の生暖かい目を向けられながら教室をあとにした……。

とりあえず二人で興宮に向かった。ただすがりたかっただけかもしれない、みんな本気で笑ってなんか居なかった……ただ笑わなくちゃ、やっていけなかったんだよね……。

「さて！ 何を買いますか？ お嬢様？」

「な、なにを言ってますの！ こんな場所です……」

ただ忘れたかっただけかもしれない、圭一のあの顔……まるで親の敵でも見るような、あの顔を……。数年前の自分の様な圭一を。

「とにかく、私が言うものを取ってきてくださいませ！」

「かしこまりました、お嬢様」

「多久矢さん！」

俺は笑いながらただ忘れていた、何が起きるか考えず時が過ぎるのを傍観していた……。

買い物を通しました後二人で手を繋いで雛見沢への道を歩く、ひぐらしの合唱を聞きながら。

「風ができませんでしたわね……」

「そうだな、さすがに夜は肌寒いからな」

「風邪を引かないで……」

「「あ……」」

なんだか、むず痒い空気だな……。

「思うことは同じだな」

「そうですね、でも馬鹿は風邪を引かないと言いますし」

「言ってる、だいたい俺は前に風邪を引いたろ？」

「あの時は多久矢さん、おとなしくて良かったのですが」

他愛の無い話をしながら沙都子と梨花ちゃんの家に向かう、こんな時間がいつまでも続けばいいと、柄にもなくそんな事を思っていた……。

「みる、やっぱり二人はラブラブでにゅにゅなのでしょ」

「梨花！？ な、なんでこんな所に？」

「二人が仲良く手を繋いでいちゃついているので僕は悲しいのですよ、にゅ☆」

狸再臨……そう歴史に刻んでおこう。

「べ、べつに私は……」

「みる、すこし遅かったので心配だったのですよ、でも要らぬ心配だったのです」

「それはごめんあそばせ、でも時間はまだ大丈夫ですことよ？」

「でも月がでたら多久矢が狼になるのですよ？」

トンデモ発言がポンポン出てくるな、さすが古手家党首だな……。

「狼……ね、まあ肯定はしないが否定もしないでおくよ」

沙都子はそれを聞くと夕焼けのように真っ赤に染まった顔をそむけながら。

「はやく来ないと晩御飯ぬきですわよ！」

そういいながらけて行った。

「みる、多久矢はプレイボーイなのですよ」

「梨花ちゃん、お前も大変だな……」

その瞬間梨花ちゃんから笑みが消えた……ただその目には決意が在った。

「多久矢……信じていいのですか？　あなたを、九条多久矢を……」

「ああ、大丈夫だ……俺は沙都子を裏切らない、崇りが来ようがオヤシロ様が来ようが俺は、沙都子を置いていかない……崇りを返品してでも沙都子と共に歩いていく」

そう心に決めた……これが九条多久矢の覚悟だ。

「あなたはここまで光に満ちているのにどうして圭一は……」

「それは違う、俺は光もあるが同時に闇もあるんだ。だから多少の事は勘違いだと自分を納得させることもできるが、圭一はちがう。心が……光が多いから闇に慣れていない」

だから信じる心と疑う心がせめぎあい、最後はどうすればいいかわからなくなる。俺も始めは圭一が気に食わなかった、仲間を疑うのは嫌いだった。……けどそれは、仲間を疑いたくないから調べ

る、調べれば調べるほど闇が見える。そのせいで圭一の心は壊れそうになっているんだ。だから俺はせめて他のやつに危害が行かないように盾になる、それが覚悟……けど、圭一も救えるなら救ってやりたい……そうおもっている。

「光と闇、か……」

梨花ちゃんはまるで何かをかみ締めるように目をつぶり、またいつもの梨花ちゃんに戻る。

「みる、早く行かないとほんとに晩御飯抜きになるのですよ」
そう言いながらいつもの様に駆けて行く、俺もそれを追いかけた……。

その日はすこし機嫌のいい沙都子と梨花ちゃんと一緒に食事をした、前に食べた時よりもおいしく感じた……。

第伍話 「嘘と真」 (後書き)

TIPS ..

「最後の晩餐」

を手に入れました。

TIPS..最後の晩餐

次の日は本当に何も無い日だった……いつもどおりになってしまった。部活の中止……圭一は前より一層殺気に満ちている……まるで殺人鬼か殺し屋みたいだ。

「今日は久しぶりに運動でもするか……」

雛見沢に来てからまったくやってなかった修行、親父にどやされそうだな。とにかく兄貴がつくってくれた弁当を持って神社の裏山にむかった……。

随分と時がたった、まわりはセミの鳴き声がいつの間にかヒグラシの合唱になっていた。

兄貴の弁当を食べてさあもう一踏ん張り……と思ったら。

「ちっ、降ってきやがった……」

雨だ。

雨は嫌いだ、兄貴の機嫌が悪くなるし、俺も嫌になる。

あの時を思い出す。

「早めに帰るか……」

少し修行に名残惜しくも感じるが仕方ないな。

俺は少し駆け足で山を降りた………マズイ、道を間違えた。

「あそこで左だったか」

すこし広い道にだがどうやら圭一たちの家の近くらしい、こちらの方はあんまり良く知らないからな……どうやって帰るか。

服がべつとりと張り付いてきた、けど知り合いなんて居ないし、

やはり勘で歩くか……。

少し歩いていると見慣れた道に來た、圭一の家に行く道だ。

「よし！ 何とか知ってる道に出たぞ」

じゃり、という音で振り向くとそこにはレナが居た……弁当箱を下げて。

「よう！ レナレナ、お前も傘が無くて困ってたか？」

「ううん、ちがうよ。ちょっと圭一君の家に行ってたの……」

様子がおかしい、違和感だ……言葉はいつも通りだが泣きそうに見える。

「ん？ おいレナ！！ どうしたその手……」

見ればレナの手から血が出ている……。

「なんでもないの！ ただレナが悪いの……」

アイツ、レナに何をした？ まるで指を鉄棒でたたいたような……。

「レナ、俺は事の始末を聞いても何もしないし、お前にもこれ以上聞かないようにするから、一つだけ教えてくれ……圭一にされただんな？」

レナはこくりと頷いた……。

「そうか……家まで送るよ……」

俺はレナを送ってから家に帰った……。

「圭一……お前は何がしたいんだ？」

じゃり……。

足音が一つ……余計に聞こえたようなきがした……。

最終話 「ハジマリのオワリ」

次の日は学校を休んだ……兄貴は行ったみたいだが俺は風邪の引きかけだった。また風邪を引くとは……引きやすい体質か？ でも体は鍛えているんだがな……。

「ああ風邪薬、風邪薬。」

飲んでおかないとまただるくなるからな。

「でもする事が無いな……」

なんとなくテレビを見ながらいつの間にか俺は深い眠りに就いていた……。

たぶん、死ぬ人間って、こんな感じかな。

また嫌な夢を見た。

……レナと魅音を殺している夢……。

バットを振り下ろす圭一。だが、その後ろに何かいる……あれは………なんだ？ 黒い影？

「圭一、やめろ……それは……ダメだ。してはいけない……」
だが俺の声は届かない、まるで狂ったようにバットを振り回している。

「くくくくく！ これでいい！ これで、これですべてがうまくいく……！」

圭一が喋っているのか、圭一に憑いた影が喋っているのか分からない……。

その時……影と目があった。ニタリと笑う影、心臓を握られたように目が離せなかった……。

「お前も同じだろう？ お前も、人ノ血が！ 肉が！ 魂ガ！ 食える事を何より望んでいタよなア！？」

「ちっ、が……う」

俺は……違う……。

「違わナイサ！ おマえハ、“シュラ”だカラな！」

「うるせええええ！！！」

そこにあつたのは影ではなく、兄貴の顔だった……。

「なんだ？ いきなり、俺は何も騒いでいないが？」

気が付けば家。

いつもの部屋。

兄貴は面倒臭そうに、言外に心配しながら俺を見ている。

「いや、ごめん……嫌な夢見たからさ……」

見れば外は絵の具を落としたように黒かった……随分と寝たようだ。

「どんな夢だ？」

俺は兄貴に説明した、圭一が魅音とレナを殺していたこと、圭一の後ろに影が憑いていてソイツが俺に喧嘩を吹っかけてきた事を……。

「多久矢……」

「どした？ 兄貴……」

「魅音とレナが死んだ……」

.....
え？

……なん……だって？

「じょう……だん、よせよ？」

内心分かっている、兄貴は冗談は言わない……真実しか言わないと理解しているから。だからこの話が事実だと……頭が認めたくないだけなんだ。

「冗談ではない……圭一が、二人を殺した」

胸をえぐられた気分だった……夢の通りだと聞いた……圭一の家で魅音とレナが殺され。凶器はバット……何もかも同じ……そして圭一は……。

「自殺？」

聞けば圭一は家から離れた公衆電話の中で“喉を掻き刎って”死んでいた、富竹さんと同じ……ありえない自殺……。

「犯人のめぼしはついている」

「マジか?! 圭一じゃないのか？」

「魅音とレナは圭一だ……それは間違いない。だが連続怪死事件の犯人だ」

「じゃあ今から……」

「無理だ……相手が悪すぎる。それ■■■■お前に伝えて■■■■が有る」

俺は兄貴の話を聞いて居たら何故か……とても、眠たくなった。

「もう、ハナす事はナイ……」

意識が無くなる瞬間……あの影の声が聞こえたような気がした……。

『事件報告』

昭和58年6月某県鹿骨市の寒村、雛見沢で女子生徒殺人事件が発生した。容疑者は前原圭一（1X）、自宅にクラスメート2名（園崎魅音・竜宮礼奈）を呼び寄せ金属バットで撲殺。室内は凄まじい返り血に彩られ被害者ともみ合った形跡が認められた。また犯行現場とは別に玄関、居間、台所でも荒らされた形跡が認められた。玄関では靴箱と壁に激しい打撲の疵跡、被害者を脅かすために前原容疑者が暴力行為を行った可能性がある。居間では絨毯が剥がされ投げ捨てられていた、その真意は不明。台所ではゴミ袋が破かれ、その中身が床にばらまかれていた、ゴミは周囲に飛散し容疑者のものと思われる手形も発見された。何らかの理由でゴミを出しそれを掌で叩いたものと考えられる、その真意は不明。また冷蔵庫に貼り付けられていたメモには「針がなかった？」と記されていた、意味不明。容疑者は犯行現場から逃走したが発見時は意識不明の重体で24時間後に死亡した。先週発見した富竹氏事件の異常な死に方との酷似に、事件の関連性があるものとして捜査を進める。異常な死に方に何らかの薬物を疑うが富竹氏事件と同様に一切検出されなかった。その後容疑者の自室から直筆のメモが発見された、しかしいくつか不審な点が残されている。メモは元々B5ページ1枚に書かれたものだったが「真ん中の数行」が何者かに破り捨てられた可能性がある。また時計裏に付着していた大量のテープ跡から「メモ以外にも何かが貼り付けられていた」との憶測が出た。第一発見者は事件との関係を噂される大石蔵人氏、メモの破損については否定する……真相もわからず進展もなく、事件は迷宮入りの様相となった。

メモの内容は以下の通り――――

「私、前原圭一は、命を狙われています。なぜ、誰に、命を狙われているのかはわかりません。ただひとつ判る事は、オヤシロ様の崇りと関係があると言う事です。レナと魅音は犯人の一味。他にも大人が4～5人以上。白いワゴン車を所有」

（ここまでが一枚目。ここから下は真横に破られている。）

（ここからが二枚目。ここから上が真横に破られている。）

「どうしてこんなことになったのか、私にはわかりません。これをあなたが読んだなら、その時、私は死んでいるでしょう。死体があるか、ないかの違いはあるでしょうが。これを読んだあなた。どうか、真相を暴いてください。それだけが、私の望みです」

病隠し編お疲れ様会

「さ〜！ それではただいまより、ひぐらしのなく頃に　死を運ぶ者〜 病隠し編。お疲れ様会！　かんぱ〜い！」

「「「「「かんぱ〜い！！」「」「」」」」

「いや〜それにしてもこのシナリオは、最後が訳わかめ（死語）だったな〜」

「圭ちゃんは最初のほうに戻っていたね、懐かしかったよ」

「だが結局はバッドエンドだな」

「しかたありませんわ、この物語の時点でハッピーエンドはSくらいしか有りませんわ」

「そうだね、だね。けど最後は多久矢君、どうなったの？」

「いやいや、それは作者にしか分からないって。」

「で？　その作者は……」

バン！！！！　と開け放たれた扉から作者が慌てて入って来た……

…。

「セーフ！！」

アウトだった……。

「こら作者！！　お前な、新参者は早くに来るのは常識だろ！」

圭一の言うとおりだった。

「いや〜悪い悪い、ちよつと仕事を立て込んでな〜」

「仕事って何なのかな？　かな？」

「それは内緒。　じゃなきゃ身元がばれるし……」

「とにかく、自己紹介するのですよ」

梨花ちゃんに言われ、支度を整えてから咳をひとつ。

「おほん！　始めまして、こんにちわ、こんばんわ。私は『L.」

』エルツーと言います。よろしく！　ブイ！！！！」

パクったな……。

「とにかく、遅れたら罰ゲーム、だな」

辰也は本編に出てこないような笑顔で、どこからともなく、罰ゲーム用のBOXを出した。

「じゃあ、今回メインの俺から引くぜ！」

多久矢は目を光らせ、一気に抜いた……その紙には。

「メイドでご奉仕!!」

と書かれてあった。

「いや、俺は本編に出てないから、見てる人も分かりづらいって！」

「だが、お前はの間、素顔で女に間違えられたと言ってたな」辰也の発言で部活メンバーの目がキラ☆と光った。

「辰也! お前な、かっこよく書いてやっтар!!」

「俺は元からああいいう性格なんだ」

「そうなんですの? なんだか始めは暗い印象でしたのに」

L・L. をメイドにする手は止めずに沙都子は興味深く聞いていた

「まあ、それはシナリオ読んだら追々分かるから、とにかくメイドはかんべん……」

「はう!!」

レナぽんがL・L. にクリティカルヒット!! 99999のダメージ!

「あんごるもあ!!」

L・L. は奇声をあげ、気絶した。

「みる、かわいそかわいそなのです。にぱ☆」

「かぁいいメイドにするんだよ! だよ!」

「えるちゃんには悪いけどおじさんも見たいし」

哀れなL・L.、だが同情はできない男性陣。なにせいつ自分があそこに行くか分からないのだから……。

「と、とりあえず。俺たちで話、進めようぜ」

圭一の提案に頷く兄弟。この際L・L. は放っておく事になった……南無阿弥陀仏。

「俺を忘れるなく、次回もみてくれ〜!!」

第壹話 「思いと言葉」

「ようす、おはよう！」

教室のドアを開け、勢いよく入って来たのは九条多久矢。つい先日、ここ雛見沢に引越してきた兄弟の弟である。

「おはようなのですよ」

それを古手神社の巫女、古手梨花が迎えた。わずか1X歳だが立派な古手家党首と呼ばれている。さらに後ろからもう一人、バンダナと八重歯がトレードマーク、沙都子がやってきた。

「おはようございますわ、多久矢さんはいつも早いですのね」「まあいつも兄貴に起こされるんだけどな」

ちょうどその時、彼の兄である九条辰也が教室に入って来た。

「おはよう。今日はトラップはないのか……」

少し残念そうに呟く辰也。辰也はいつも沙都子が仕掛けるトラップが楽しみなのだ。

「たまには圭一に仕掛けたいときもあるんだろ」

「辰也さんはいつも攻略されますからつまりませんわ」

そうなのだ、九条辰也をねらった場合、確実に回避される。それが沙都子は悔しいのだが、辰也に鍛えられているおかげで、圭一は確実に罠にはまる。

「今日はシンプルにバケツなのです」

見れば圭一が入ってくる場所にはバケツがあった。扉を開けると水が振ってくる仕組みだ。

「おはよう、みんな」

するとレナが登校してきた、見たところ圭一はまだらしい。

「圭一は？」

「今日は圭一君も魅いちちゃんも、遅刻するかもしれないんだよ、だよ」

どうやら待ち合わせの場所に圭一と魅音は来なかったらしい。

「ならトラップに掛かる可能性は上がるな」

「だな、おそらく走ってくるから、たぶん確実だと思うぜ」

「圭一さんは確実にハマりますから、心配いりませんわ」

「なでなでするのですよ、にぱ☆」

そして外を見ると案の定、魅音と圭一が走ってきた。

「来たみたいだな」

「さあ貰いますわよ!!」

ガラッと扉が開く、そしてあるのは水浸しの圭一、見事にはまった瞬間だった。

「オーホホホホ! かかりましたわね、圭一さん!」

「圭一元気だすのです(なでなで)」

そして後ろから魅音が自分の席に座る、その間圭一は沙都子にデコピンをしようとして、レナにパンチを貰っていた。

「あっはっは、相変わらずつめが甘いね」

「魅音? おまえ……」

「勝負は最後まで分からないんだよ?」

どうやら魅音と圭一は賭けをしていたらしい。

「哀れ圭一、勝負にも試合にも負けたな……」

「ちきしょー!!」

昼休み、皆で仲良く給食をつつきあい、雑談中、魅音から発表があった。

「明日ね、叔父さんのお店でゲーム大会が有るんだよ」

「何!? ゲーム大会だと! よーし魅音。今日のリベンジしてやるよ!!」

「圭ちゃんにできるの?」

いつもの売り言葉に買い言葉、見ていて二人はまるで男同士のような錯覚を覚える。

「俺たちを忘れちゃ困るぜ？ 魅っちー、九条を舐めんなよ！」

「まあ所詮は遊びだろうが、勝負事なら九条は負けられない。覚悟しておけ……」

「辰也さんたちだけではありませんことよ！ ワタクシも優勝狙いますわよ！」

「みー、僕もがんばるのですよ、にぱ☆」

「レナも負けないよ！！」

皆気合十分、明日に向け今日は部活は無し。明日、全力で試合をするために。

「けどさ、魅音でいつもおっさんぽいっていうか、男っぽいよな」

帰り道、いつもの4人で家に向かってる中、多久矢がいきなり話しだした。

「そうか？ べつに男に見えるわけではあるまい」

「そうですわよ、魅音さんも立派なレディですよ」

「いやそうじゃなくて、なんでわざわざ男っぽく振舞っているのか分からなくてな」

「みー、多久矢は魅いを良く見ているのです」

「いや、そりゃ5年来の付き合いだからさ」

「だが本人も今更、印象を変えようとはしないだろう」

「わかんねえぜ？ 恋でもしたら女は変わるもんだぜ？」

「お前が女を語るのとは10年は早いと思うが？」

「うるせえよ……」

多久矢は気付いている、魅音の心に。だが言い出せない辛さが見ていて分かってしまう。だが本人が変わろうとしない限り変わらない。明日も明後日もかわらず、この状況が続いていく。

「まあ明日は、沙都子と梨花相手でも容赦しないからな！」

多久矢はその考えを振り切るように、大声でいつものようにおちゃらける。

「あたりまえですわ〜！ 多久矢さんこそ、せいぜい足をすく
われないよう、気を付ける事ですわね！」

「沙都子だけではないのです。ぼくも忘れないで欲しいのです」
「まあ明日は正々堂々と戦おうな」

翌日、興宮ゲーム店。ここは園崎の店のため少し表通りから外
れているが、それでもまあまあ繁盛しているらしい。そして今日部
活メンバーがまさに命がけで戦いに臨んで行く。

「なに〜！ 優勝賞金5万だと！」

圭一が大声をだして驚いている、そう今日の大会で優勝したも
のには、賞金5万円が授与される。魅音は自らを死地に追い込む事
で、さらに士気を上げているらしい。

「兄貴！ 5万だってよ。俺が買ったら今日は肉料理な！」

「勝てたらな……」

こちらもなにやら賭けをしている模様。

そしてとうとうゲーム大会の火蓋が切って落とされた。

「参加者は17人、これを6卓に分け、勝者は次のテーブルに
上るってこと。わかった？」

わかりやすいな、さて誰が俺と当たるかな。

辰也は考える、子供相手に本気を出すわけにもいかない。もし
相手が部活メンバーなら容赦はしないがな。

「さあ、次はたっちゃんだよ。引いて引いて」

魅音がBOXを差し出す、俺がこいつなら初戦はおそらく……
「6だな」

「じゃあ最初はたくちゃんとか〜、九条兄弟の戦いなんてそう
そう見られないもんね〜」

「魅音、イカサマは……」

「あたしがイカサマしたっての？ どうやって〜？」

「ちっ、もういい。士気を上げるためだかなんだか知らないが、その喋り方はやめろ。虫唾が走る」

俺は魅音の言葉も聞かず、6のテーブルに向かう。

「やっぱり兄貴が相手か……」

「気付いたか？」

「ああ、部活メンバーが皆バラバラだ。こんな事ありえない」
そう見れば部活メンバーが同じ席に居るのは6番テーブルの辰也と多久矢だけ、こちらは数が合わないためにしかたなく同席になったのだろうな。

「じゃあ種目は？」

「マスターがもって来るらしい」

そしてマスターが持ってきたものは「ルーレット」

「ほう、賭け事か……」

「イカサマなしな」

「分かっている、イカサマをしない相手に九条はイカサマをしない」

そして九条兄弟の戦いが始まった……。

「五分五分だな」

「時間も無い、次は全額懸けるか？」

「だな」

それほど白熱するわけでもなく淡々と進む勝負。そこに魅音はさらにちよっかいを出してきた。

「失望したね、皆本気なのに二人は本気じゃないんだ？」

「あたりまえだ、5万程度の賞金で本気が出せるか、大体一番強い多久矢とルーレットだと？ それこそ失望だ。俺に喧嘩を売るなら、他の奴にするんだな……」

「まあまあ兄貴、最後は全額、スモールorビックで行こうぜ」
そしてこの戦いは辰也の勝利となった。

「よおおし！！ 魅音、今度は直接対決だ！！」

圭一が大声で魅音に勝負を挑む、どうやら何か仕込まれたよう

だな……。

「ごめん圭ちゃん、おじさんこれからバイト」
ズテツと転ぶ圭一、つまりこれでゲーム大会はお開きのようだ

……。

「みんな、今日はありがとう。おかげでイベントは大盛り上がりだったよ。これ今日のお駄賃だ」

マスターが紙袋をもってきた。

「私には？」

「親戚にはなし！」

どうやら俺たちだけらしい

「じゃあ俺はこれな」

そういつて出てきたのは……

「おっ！ それってシンk」

ガスッ！！

「危ないネタをやるな」

そして多久矢は……

「俺はひないt」

ガスガス！！

「お前は黙って居ろ……」

そして辰也は、

「すいぎn」

「奥義・夜乙女！！」

多久矢は3メートルほど空に飛んで落ちた……。

「お前は一度死んで来い……」

辰也が少しキレた日だった。

「レナ、これお前にやるよ」

「くれるの！？ レナに！」

ばっかだなく圭一のやつ……。

「魅っちー！！」

「へ？」

ひない■ごを投げてやる。

「たくちゃん？」

「俺は男だからな、女のお前にやるよ！」

「い、いらないよ。だいたいおじさんには似合わないよ！」

「ほく、そういう事言うんだく、へくほく」

「な、なに？」

「おれはお前の部屋に有るぬいぐ……」

「たくちゃん！！　ありがとう！！　ありがたくもらうよ！！」

「！」

魅音は真っ赤になった顔を隠すように自転車にのり、その場を後にした……

「お前物好きだなく、あんな男女に……」

ゴンツと鈍い音がした。

「いて！！　なにすんだ！」

「自分の胸に聞けよ……」

多久矢は一人帰っていった。

「なんなんだよ、多久矢の奴……」

「今のは圭一がわるいのです。反省するのですよ」

「そうですね、だいたい圭一さんはレディにたいしてデリカシ―が無すぎですことよ！」

二人に言われてもなお分からないらしい圭一、魅音も大変だな……

「そうだ、これはふたりにやろう」

そう言って辰也はすい■ん■うを沙都子と梨花にあげた。

「いいんですの？　ありがとうございますわ」

「だいいドールなのです」

なにやら危ない事を言っているがどうやら気に入ったらしいな、さて今度は多久矢か……

「じゃあまた明日な」

俺も家路についた……途中多久矢の愚痴に付き合い、夜ご飯が

ずいぶんと遅れてしまった……。

肉が食いたかった……。ちくしょう……。……。

第貳話 「偽りの会話」

翌日は最悪だった、俺こと、九条多久矢は今最悪な格好をして
いる……。

「多久矢、今日はお前に同情するぞ……」

「同情するなら、変わってくれ！」

スクール水着。女性が着ればさぞかし体のラインが強調され、
美しく見えただろう。だが男が着ればそれは拷問器具と成り代わる。

「流石にそれは着たくは無い……」

ありえない位真剣な兄貴に断られた、そりゃそうだ。

圭一。お前は俺が全力で潰す……！

運が悪かった。九条多久矢は大富豪のルールを知らなかった。
そこを潰け込まれ慣れた頃にはゲームが終わっていた。

「圭一……一つ提案がある」

恥だがこうするしか挽回のチャンス……いや、復讐のチャンス
はない！

「なんだ？ なんでも聞いてやるぜ？」

足元見やがって。

「いや、今度お前が負ければ、今までの罰ゲームをすべて受け
る」

「なに！ じゃあ勝ったときは？」

「俺が一週間お前の執事もしくはメイドとして働いてやる！」
部活メンバーはさらにヒートアップ。なにせ一週間だ、破格の
罰ゲームだ。

「いいぜ、かかってきな！」

……………。

そして解散の時間……。

「おぼえてろ～～!!」

圭一はスクール水着、さらには他のメンバーが着ていたものも着せられて、萌えの集合体みたいな格好になった。

「いや～きもちいい勝ちっぶりだったね～」

「最後の逆転劇なのです」

「まあ多久矢さんの痴態も良かったですが、圭一さんは格別ですわね」

「でも、俺もこの格好で帰るんだぜ？ きついよ……」

「できることなら兄弟の縁を切りたいところだがな……」

唯一罰ゲームの無かった辰也、彼がこのような格好をするときは果たしていつくるのだろうか……。

帰宅後、神速の速さで着替えた多久矢、よほど気疲れしたのだろう、リビングにあるソファに寝そべっていた。

「多久矢、今から買出しだが何が食いたい？」

「飯ね～、そうだ！ 兄貴、俺興宮でいい店見つけたんだ、食べに行こうぜ」

「外食か、楽に成るし偶にはいいか……」

九条兄弟は多久矢の提案から興宮のいい店に行く事になった……。

興宮。雛見沢からわりと離れているが、一応必要な物がそろうため、そこまで不自由はしない。

「で？ その店とはどこにあるんだ？」

「あっちあっち」

多久矢の案内で来た所は『エンジェルモート』普通のファミレスだ。

「ここか、そういえば毎回ここを通るが入る事はなかったな……」

「いい店だぜ、あれ？ 圭一」

見れば圭一と父親らしき人と一緒に出て来た、二人も外食か。

「なんだ圭一、お前も来てたのか」

「いや俺は親父に連れてこられたただだよ。俺たちは帰るから、また明日な」

「おう、今度は負けねえぞ」

圭一と別れた後に店に入った……が、後悔した。

「多久矢、お前な……」

「いい店だろ、ここ」

こいつの言ういい店というのはこういうことか！

店内を歩くウェイトレスは皆、足や肩が露出した格好だ。これはまだ罰ゲームの方がマシかもしれない。

「帰ったら殺す……」

そう心に誓った……。

「いらっしやいませ、おきまりになられましたら、および下さい」

そこに水とメニューをもったウェイトレス……魅音？

「魅音？ お前……」

「へ？ たっちゃんにたくちゃんまで……!?」

「なんだなんだ？ おまえバイトの手伝いってココかよ、知ってりやもう少し早く来たのによ」

「ち、違います、私は詩音です!!」

「はあ？ 詩音って、お前が？ ありえねえって、詩音はそんな格好で恥ずかしがるほど可愛くねえよ」

「でも私ほんとに……」

「なら髪を上げてみろ」

「へ？ いやそれは……」

「詩音なら上げられるなあ？ 背中にも無ければ」

「だな。どうだ？ 自称、詩音さん」

しばらく押し黙っていたが、観念したらしく、ため息を吐いて……。

「もう二人とも意地悪しないでよく、だいたいなんで昔っからどっちがどっちか分かるの？」

「分かったとおもうけどなく、お前は詩音じゃないんだし……な？」

この二人には驚かされる。私たちは……園崎魅音と園崎詩音は同じだった。今は、違いがある。でも些細なもの。少なくとも、今来てる制服でもない限り、他者にばれる事はない。でも……。

「はあく？ 詩音って、お前が？ ありえねえって、詩音はそんな格好で恥ずかしがるほど可愛くねえよ」

「ち、違います、私は詩音です！！」

「はあく？ 詩音って、お前が？ ありえねえって、詩音はそんな格好で恥ずかしがるほど可愛くねえよ」

確かに……。詩音なら余裕だろう。

「でも私ほんとに……」

「なら髪を上げてみろ」

「へ？ いやそれは……」

「詩音なら上げられるなあ？ 背中に何も無ければ」

「だな。どうだ？ 自称、詩音さん」

さすがに完敗。この二人にはかなわない。

「もう二人とも意地悪しないでよく、だいたいなんで昔っからどっちがどっちか分かるの？」

詩音モードは止めて元の……園崎魅音に戻る。

「分かったとおもうけどなく、お前は詩音じゃないんだし……な？」

ズキリ……と、胸が痛む。詩音ではない。知っている、でも言
ってほしくない事。分かってる、悪気があって言っていない。でも
……。

「多久矢……。言葉が過ぎるぞ？」

冷えた声音。どこかすつきりする声が、耳に入る。

「分かってるって。すこし苛めたくなるの、男の子は♪」

「気持ち悪いな……」

「真顔で返すなって……、辛くなるから」

「そうか？　ならキモイ」

「いや同じだって！」

「じゃあ気色悪い」

「オイ……」

我慢出来そうにない。

「ぷっ！　あっはっははははは！　二人とも、お店で騒がな
いでよ。とにかく、これは内緒。わかった？」

「わかったわかった。じゃあ店員さん？　俺はハンバーグステ
ーキ。デミグラスソースな？」

「俺も同じでいい。オニオンソースでな？」

「了解。ちょっとまってね」

私は、詩音スマイルで答え。その場を離れた。

「多久矢。どうした？　急に」

「いや？　唯……、イラっとするんだよ。たまには、お互いを
切りはなさないと……、自分がナニか、忘れちゃうんだよ」

……。

「それは経験談か？」

「さあ……ってねえ……。どちらでしょうか？」

はあ、はぐらかすのが下手だな……。

「まあいい。食事の席でまでする話じゃない。舌鼓……といこうか……」

「へいへい。頂ます、お兄様」

第參話 「鬼の棲む村」 (前書き)

カナカナカナ……………。

静かな夕暮れ時。蟬の雄たけびは、蝸の静かな合唱に変わる。

「あら、ひぐらしの鳴き声……」

ある診療所。田舎にしては、ずいぶんと大きく機能が充実した場違いとも言える建物。

「そろそろ、綿流しのお祭りですね……」

その一室。看護師・高野三四は静かに嘯く。

「今年も、オヤシロさまの祟りは起きるのかしら……?」

第參話 「鬼の棲む村」

静かな夕暮れ時。蟬の雄たけびは、蝸の静かな合唱に変わる。

「あら、ひぐらしの鳴き声……」

ある診療所。田舎にしては、ずいぶんと大きく機能が充実した場違いとも言える建物。

「そろそろ、綿流しのお祭りですね……」

そのの一室。看護師・高野三四は静かに嘯く。

「今年も、オヤシロさまの祟りは起きるのかしら……?」

数日後。九条兄弟はあまり部活は出来ず、ただ登校。ただ勉強。という毎日であった。そんななか……。

「おい多久矢。山爺からの連絡だ。例の物、なんとか出来るみたいだぞ?」

「マジ!? よっしゃ! さすがにエモノ無しはきついんだよねえ」

心底嬉しそうに笑う彼は、歳相応の青年に見える。

「ただ、作り手は少々頑固らしい。使い手をみて決めるから、明日か明後日に顔を出してほしいとの事だ。いけるか?」

「りょーかい。ついでに何か買っとく?」

「てな感じに引き受けてきたけど………」

彼の手には小さなメモ。そこにあるのは……。

……カレーの材料。

デザート材料。

三月の鍰。

三月の鞆。

カツカレーうどん定食の材料。

……うん、無理。

いや、まだ上二つはわかる。カレーはカレーだし、デザートは……まあ、何とか成る。でも、三月の鍰と鞆って……。いや、これもまだいい。山爺に会う序でに聞きゃあいい。

でもよお……。

「カツカレーうどん定食ってナニ！？ どことどこが分かれてんだ？ 教えてくれよ兄貴！」

まあ、メモもらって確認しない俺も悪いけどよお……。

「はあ……。どうすんべ……」

「ンにすんだあああ！？ ンのやろおううううううう！！」

うるせつ……。なんだあ？

圭一と不良っぽい三人。後ろに倒れたバイク。

……圭一が考え事、バイク倒す、不良くる、絡まれる。どうです？ 皆さん。俺は目の前でうるさい声を出されるだけで、こんな推理が可能です。

つか、冗談はさて置き。あいつら人間か？ 言語ねえぞ……

…。

「しゃアっすぞおらぁッ！……！！」

お！ 殴る。

「やかましいんだよ！！ クソボケ共があ……！！」

またうるせ。今度は何？

「私の目の黒いうちに失せな！！」

「んだてめ……」

「圭ちゃん置いてさっさと失せな！」

久方ぶりの御党首サマって訳ね……。

んじゃ見逃せないね。

「このアマあああ……！！！！」

ガシッ！！

「一名様、お空の旅にごあんない……！！」

ヴぁあっこおおおん♪

あ、やりすぎ？

「てめえ、んにすんだらああああ……！！」

だって正当防衛っしょ？

ほら……はやく逃げねえと、人が集まるよぉ？

そこらじゅうの人が相手を取り囲んでる。これは素人にゃきついな。大量の視線は殺気と勘違いしやすい。たぶん怖くて仕方ねえんじゃないか？

「ハイハイ、どうしましたかなあ？」

この間延びした喋り……。大石蔵人……。面倒くせえ……。……。

「大石……。刑事……」

「これはこれは園崎のお嬢さん。相変わらず勇ましいことで……。まあ君たちは署でお茶しましょう。ホラホラ、遠慮せず」

相変わらず容赦ない。不良が騒いでいるが、関係ない。所詮子供。大人が数人係じゃ逃げれない。

ま、今回は目つけられなくて良かった良かったと。

詩音の号令で集まった人たちも、元に戻り一安心と。

「あ、多久矢。ありがとな、さっき助けられなかったら魅音が……」

「もう、圭ちゃん。私は詩音です！」

ほんとコイツ馬鹿じゃねえ？　いつまで一人だと思ってたんだか。まあ当たり前だけど。

「とにかく、助けたんだから茶ぐらいだすだろ？」

「ええ、お二人分、おごらせてください」

てなわけで、水分補給が可能になった、タダで。

「さっきの村人たち、驚きました？」

「いやいや、魅っちー？　なんで貴女はいっしょに喋ってますか？　「おい魅っちー、仕事……。しろよ」

「今休憩デス！　それより、いまのは圭ちゃんに話したんです

よ？」

「うえ?! おれ！」

はあ、このいき当たりばったりの純情チェリボーイは何を焦ってやがりますかね。

ま、それからは村の仕来りうんぬんかんぬん。ダムがどうのこのと、まったく。今頃話すかねえ。部長さんは……………」

「それにしてもさっきはすごかったよな。まるでみんな一緒に成ったみたいに。覇気と言うか殺気と言うか……………」

「くつくつく、あれが殺気? まさか、ただ睨んでるだけで殺気には程遠い」

「いやいや、多久矢は後ろに居たろ? だから知らないんだよ」

ふうん。そういうこと言うかね。

「いいか? 圭一、殺気ってえのは……………」

ふわりと、殺気で圭一を撫でる。

「こういうもんだぜ?」

……………あり? 言葉がない。ただのしかばねのようだ。

「おいおい。これで動けないって、どんだけ……………」

隣に殺気!!!!

「堅気の店で、なにやってんですかああああ!!!!」

かこ……………ん!!!!

「まったく…………。ほら! 他の人もびっくりしてるでしょう!」
いや、それはお前えのトレイの音…………。

「まっ、たとえどんな状況でも、園崎の婆さんに嫌われねえ限り、みんなから睨まれる事はねえよ」

たとえば、引っ越してきて挨拶してない…………とか。

「……………」

あれ? まさか……………、ビンゴ?

「挨拶とか、行ってない」

「おいおい……、婆さんはそう言うの厳しいんだから、行っとかねえと損だぜ？ 今日あたりでも詫びに行ったら？」

「そ、そうだな。菓子折りでも……」

「スイカでも持ってけ。ウマイやつな。結構、舌肥えてるぞ？」

「うん。そうする……」

ちよつと震えてるな。さすがに怖いわな……。

「もうタクちゃん！ 圭ちゃんを怖がらせてどうするんです！
うちの婆っちはそんなに怖い人じゃありません」

婆っちゃん……ねえ。鬼婆じゃねえのは愛嬌か。ま、分かんねえか。

「はいはい、分かりました。それじゃ俺は帰ります。これコー
ヒー代」

俺は千円札をテーブルに置き、立ち上がった。

「え、これ奢りですよ？」

「怖がらせた代金。圭一、取っとけ」

「いやいや、こんなに……」

「ばか。メニュー見てみる、三人分で1050円。割高だ。詩
音のは奢らねえ」

「ちえ。しっかりしてますね」

「普段おちゃらけてる奴ほどご用心。これ、仕事人の鉄則」

なんの仕事だよ。そんな言葉を聞きながら店を出る。良いねえ、
平和ボケ。いつかは俺たちもこんな事が当たり前に成るのかねえ……。

いけね。山爺の約束、もう30分もねえ。早くしねえとな！

興宮裏町。たとえどんな大人しい町にも、裏の顔、大人の街道
ってえのは在る。園崎組やホテル街。キツイ香水振りまく別嬪さん。
でも、さらに奥。そこを通り抜け、まるで迷路みたいな道を行くと

.....。

「山の里……。たけのこかきのこかはつきりしろよ……」

とまあ、冗談は置いといて。ここは所謂情報屋。ただ表向きは判子屋。でも、こんな裏街道に判子屋は繁盛出来ないし、誰も作らない。でも、それでも尚作るのは副業が裏に通ずる者。早い話が非合法。裏に生きる人間には情報は不可欠。唯、この爺は気に入った相手しか情報をわたさない。

「爺。来てやったぞ。そろそろ表に店作れ、来にくいだろうが……」

「ああん？　それで店つぶれたらどうすんだ？　お前えが雇ってくれんのか？」

山中源次。通称山爺。若いような喋り方だがもうすぐ90。化け物だ。

「悪い悪い。で？　その作り手は………っ！」

瞬時、殺気を浴びて横に飛ぶ。フェイント無しの縦一閃。音はない、でも殺気は今ので増えた。

「ほう……、今のを避けるか……、中々に……面白い」

見た目はよぼよぼの爺さん。でも殺気が半端ねえ………、面白！

「爺さん。ひょっとしてお前を伸したら勝ち？」

「いや……、あの一閃を避けたのなら………問題ない」

ふーん、試験って訳。

「で？　作ってくれるの？」

「無論、この世に二つと無い業物。神威……。創ってやろう」

なんか……劇場染みてると言うか、わざとらしいと言うか……。まあ大丈夫だろう。

「つか、名前決まってんの？」

「無論。……名は其の力。己の力が其れを越えた刻、新たに名を授けるがよい……」

……強けりや良いけどよ……。コイツ、キャラに酔ってないか？

「じゃ、頼むぜ？ 神威……だっけか？ 楽しみにしてるよ」

「其の前に式。血を一滴……」

……………コイツ、大丈夫か？

「正気？」

「熱を抜くのに使うのだ……、酔狂では無い。安心せい」

まあ、そんなら仕方ねえか……………。

俺は一滴の血を（ちゃんと注射器使ってた）爺に渡して、そそくさと帰路につく。

なんか……、色々疲れた……………。

さて、兄貴の買い物を。

「おそい！ いつまで掛かっている！！」

怒られました、ハイ。さすがに圭一と喋ってたのが拙かったか……………。

「まったく、刀一本確認でいつまで掛かれば気が済むんだ！！」

そしてただ今絶賛説教中……………。

「大体お前は」

「分かったって、兄貴だってメモの使い方間違ってるだろうが！！」

「お前が何か買ってくるって言ったから頼んだんだ！ でなければ態々お前に頼むかつ！ あれは俺が使うためにメモっていたんだ！ あの時はお前が！」

『りょくかい。ついでに何か買っとく?』

『必要ない。お前はお前の用事だけ済ませて来い』

『いやいや、そう言わずに。いつも大変な兄貴のためだって

!』

『俺のメモを見ても分かんと思うが……………』

『ダイジヨブダイジヨブ、俺たち兄弟だろ? 分かるから、な

!』

回想終了……………。

「……………俺、ちょっと宿題が……………」

ガシッ!!

「まて愚弟……………」

「……………お兄様、許しては……………」

「……………頂けんな」

たぶん今日が命日。これを見た貴方、どうか俺を助けてくださ
い。それだけが俺の……………。

「九条流闘技……………漆拾捌式。散華・牡丹」

いや、最後まで言わせてよ。兄貴……………。

「花に塗れて、地獄に堕ちろ」

教訓。九条辰也には逆らうな……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6461r/>

ひぐらしのなく頃に ～死を運ぶ者～

2011年10月8日07時07分発行